

平坦部向け飼料用等多収性水稻品種の選定と栽培技術の確立

～ 奈良県の栽培条件に対応した飼料用米の安定生産のために ～

国では自給力の維持向上と水田の有効活用を図るため、飼料用米を戦略作物と位置づけ、その生産と利用の拡大を進めており、近年、飼料用多収性品種が多数育成されています。このうち、‘ホシアオバ’と‘北陸193号’が、奈良県への適応性があると考えられました。

1. 背景と目的

飼料用米の生産拡大を図るため、国等の研究機関を中心に、奈良県を含む西日本の温暖地向けに適応性を持つとされる多収品種が多数育成されています。

しかし、奈良県平坦部の水稻栽培においては、水利不便地が多いため移植盛期が6月上旬以降と遅いこと、また、9月中旬以降の気温が冷涼となりやすいことなど、多収を図るには不利な条件があります。そのため、安定して多収を得るためには、奈良県での栽培に適した品種の選定とその特性を把握する必要があります。

2. 研究成果の概要

2015年から、‘ホシアオバ’、‘北陸193号’、‘タカナリ’、および‘モミロマン’を調査した結果、主食用品種‘ヒノヒカリ’と比べ、‘タカナリ’と‘モミロマン’は登熟が不良で低収でしたが、‘ホシアオバ’と‘北陸193号’は多収となり(表1)、奈良県での適応性はあると考えられました。

ただし、‘ホシアオバ’、‘北陸193号’とも‘ヒノヒカリ’より成熟期が遅く、穂数は少ないの

で、安定生産のためには、平坦部で6月上旬までに移植し、かつ、栽植密度をあまり疎くしないような栽培管理が必要と考えられます。また、これら品種は長稈にもかかわらず強稈で、倒伏には比較的強いため(図1)、多肥栽培をすることでさらに増収しました。

3. 実用化に向けた対応について

飼料用米生産に取り組むためには、販売先を確保しておく必要があります。また、主食用品種と併せて生産する場合には、主食用米に飼料用米が混入しないように圃場管理や収穫、乾燥および調製にかかる農業機械の清掃を十分に行うなどの対策をとる必要があります。

(穀物栽培ユニット 杉山 高世)



図1 ‘北陸193号’(左)と‘ホシアオバ’

表1 ‘ホシアオバ’、‘北陸193号’の出穂・成熟期調査および収量

品種名	施肥法	出穂期	成熟期	稈長	穂長	㎡穂数	粗玄米重	精玄米重	千粒重
		(月. 日)	(月. 日)	(cm)	(cm)	(本/㎡)	(kg/a)	(kg/a)	
ホシアオバ	標準	8. 21	10. 15	92	23. 0	219	72. 4	70. 6	29. 8
	多肥	8. 21	10. 15	93	23. 9	255	73. 8	71. 9	29. 6
北陸193号	標準	8. 27	10. 19	94	27. 5	223	76. 7	73. 1	22. 9
	多肥	8. 27	10. 19	92	28. 5	225	83. 5	79. 7	22. 7
(比較)ヒノヒカリ	標準	8. 25	10. 10	88	19. 3	357	65. 1	60. 2	22. 7
	多肥	8. 25	10. 10	89	20. 5	354	72. 4	68. 3	23. 0

注1) 数値は2015, 2016年の平均値。移植期は6月10日頃。栽植密度は条間30cm, 株間18cmとした。

注2) 施肥について、標準は窒素成分0.8kg/a(肥効調節型全量基肥)、多肥は標準に加え穂肥として窒素成分0.3kg/aを施用。

注3) 粗玄米重は無選別の、精玄米重は網目1.8mmのテストグレーダーで選別した玄米の重量を表す。